野村生涯教育だより

No. 433

（公財）野村生涯教育センターのシンボルマーク
［n］は、名称「Nomura」と、基本理念「自然観＝Nature」の頭文字を表している。

発行所
公益財団法人 野村生涯教育センター
東京都渋谷区代々木 1-47-13 〒151-0053
TEL 03-3320-1861　FAX 03-3320-0360
URL www.nomuracenter.or.jp

もくじ

● 年頭にあたって
● 金子理事長より季節のご挨拶
● ノムラセンターニューズ 88 号への反響
● ガザレポート

奥秩父、甲武信岳山頂より

年頭にあたって

（公財）野村生涯教育センター
理事長　金子由美子

新年明けましておめでとうございます。

お正月は天候に恵まれて穏やかな幕開けのように感じていた矢先に、新型コロナウイルスオミクロン株の感染者が増え始め、アメリカでは、一月三日の一日の感染者数が約一〇八万人という報道もありました。また、十二日には、ＷＨＯがヨーロッパ、トルコ、ロシア、中央アジアなど五十三カ国で、六週間から八週間後くらいには、人口の五〇％が感染するとの予測がされていました。また、日本においても九日には沖縄、広島、山口にまん延防止等重点措置が適用され、昨日、東京は急激に二〇〇〇人を超えました。日本全国に感染が拡がっている状況にあって、本当に世界が繋がっていることを否応なく実感するなかで、今、創立六十周年記念式典の開催についても考え抜いて決めていかなければならないという思いです。

こういった厳しい状況であっても、新年の運営会議を、オンライン上であるにしても、このように持てたことが本当にありがたく、皆さまのお顔が見えることはとても嬉しいことだと感謝しています。

この状況下で、この年頭の挨拶をどのようにしたらよいのかとても悩むなかで、改めて本来、年頭言とはいったい何だろうというところに思いが至ったときに、まず私が今年という年を、そして未来に対して、どういう指針、目的を持って日々を送ろうとするのか、何を自分に課し、皆さまと共に歩もうとするのかを考えるチャンスであるということに行き着きました。

今年は野村生涯教育センター創立六十周年の年にあたり、組織として還暦を迎えることになります。

還暦というのはご存知のように六十年で干支が一巡し、再び生まれた年の干支に戻る年回りのことです。それで『あっ、センターって寅年なんだ』と思ったのです。干支は十二支と十干を組み合わせたもので、今年は壬寅という年で、この組み合わせが六十年前と同じ、つまり一九六二年も壬寅だったということです。

この壬寅の特徴を調べてみますと、「乳虎」や「母虎」とありました。いろいろな意味合いがあるらしいのですが、「乳虎」とは出産後の乳呑み児を持つ雌虎のことで、家族思いではあるけれど、性質が最も狂暴だとも書かれていました。さまざまな説があるようですが、つまり野生の世界では子どもを守るために狂暴になることと私は推察しました。

そして、壬寅は厳しい冬を乗り越え新しいステージに向かう準備段階に当たる年と言われているそうです。その理由は、壬と寅のそれぞれの意味からきているとのこと。「壬」は妊娠の妊に通じることから、エネルギーを蓄える意、そして十干で九番目に当たることから次の周期の準備期間という意味があり、厳冬、春を待つ厳しい冬、また、沈滞、留まっているということを表すそうです。次に「寅」ですが、螾（みみず）に通じ、作物の実りを助ける螾が土の中を動くイメージから新しく動き始めた段階という意味を持つ。また干支で言えば寅は三番目になり周期のはじめなので誕生、つまり大きな成長に繋がることを表すということです。

また一九六二年に、どのようなことがあったのかを調べてみました。アメリカ初の有人地球周回飛行。ビートルズのレコードデビュー。日本では戦後初の国産旅客機初飛行、首都高速一号線開通など、終戦後大きく成長発展していく一歩になった年であったのかと思いました。そして、野村生涯教育センターが出発した年なわけです。

今年二〇二二年、創立六十周年の、この還暦の年にセンターはどのように成長していかなければならないのか、生まれ変わらなければならないのかを思いました。

創設者は一九六〇年代初頭、身近な方々の子どもの問題から、教育は何のために、誰のためにあるものなのかに思いが至り、そこから社会の実態、時代の持つ課題にまで行き着き、この活動を始め、教育論を構築されました。そしてその教育論の大事な要点として、今世紀を生きる私たち人間にとって大前提にしなければならないことは「時代認識と自己認識」である。それは、自分たちがどういう時代を生きているのかの認識を持つことの重要さと、この自分の生きる時代の上に立って自己とは何かを知る自己認識の重要さ、つまり、マクロ的時代認識とミクロ的自己の凝視、自己認識は表裏一体をなすものであることを創設者は説き続けてくださいました。

では、改めて二〇二二年はどういう時代なのか、六十年前の一九六二年とは激変している時代です。今年コロナ禍の三年目、未だ収束に至らず、それどころか新たな変異株の出現に人類は悩み、このことからしても、もしオミクロン株が収束したとしてもまた別の株の出現に危惧を持つような状況です。

そして、それにもまして私が今懸念していることは、生態系破壊、地球温暖化の問題です。創設者がこの活動を始められたマクロ的動機の中で危惧されていた大きな課題の一つは、人類が核兵器を保持しそれを使った場合、地球を、人類を破滅にもっていくのではないか、ということでした。しかし二十一世紀の課題は、年頭からウクライナ問題や、専制主義対民主主義、米中問題など国や民族の対立による戦いへの懸念も勿論ありますが、私たちの経済活動の行き過ぎによる熱帯雨林破壊はＣＯ２排出に拍車をかけ、地球温暖化、生物多様性の喪失を助長、連鎖的な影響をおよぼしていることで、世界中でさまざまな生き物が急激なスピードで絶滅しているという事実です。

昨年暮れに主人が「野村生涯教育論に通ずる記事があるよ」と教えてくれたことから、その記事を書かれた生物学者で、東京大学定量生命科学研究所教授の小林武彦氏の本を読みました。小林教授によると、今地球は生物の大量絶滅時代に突入しており、現在地球に存在する推定八〇〇万種の動植物のうち、少なくとも一〇〇万種位が今後数十年以内に絶滅の可能性があると言われている。それは要するに人間活動による環境変動の結果であり、このペースは地球史上最高レベルと言える。つまり人間が必要以上に自然に手を加えなければ、バランスのとれた生態系が構築されるのではないかと言われています。

そして、動植物の種族が減る、多様性が減るということに、我々はあまり危機意識を持っていなかったかも知れないと思うが、それはなぜか。なぜ関心を持っていなかったか、危機意識がなかったかというと、今までそういうことに遭ったことがないからです、と。しかし、このことは実はすごく重要なことで、生物学者は多様性がとても重要だと思っており、例えば、ゴキブリや人の血を吸う蚊など、いなくていいと思っている人はいるかも知れないが、生態系のなかで我々はすべて繋がっている。繋がっている、という意味は、もともと一個の細胞からすべてが始まり、それが三十八億年かけて進化してすべての生物になっているので、もともときょうだいと言うか、親戚と言うか、繋がっている。その繋がりの中にお互いの多様性があり、違う種類でも支え合っている、ということなのだそうです。

私たちは野村生涯教育を通して、かけがえのない生命を学んできました。生命、これは人間だけでなく、生きとし生けるものすべてなのだと学んできたことを、小林教授の生物学的視野からの識見を読み、改めて思いました。そして、むしろ人間が生態系のバランスを欠くことをして

いることによって今の地球の状況が生まれていることを、今までよりもリアルに感じられたように思いました。

教授はまた、地球が誕生し、最初に一つの細胞が生まれるまでも長い時間を要しているわけですが、その一つの細胞から子孫がさまざまに進化して多様な生物が存在するようになり、長い時間を経て人類も生まれてきたのだと。そして、その人類が生まれる六〇〇万年位前、世代でいうと三〇万世代ほど遡ると、ゴリラやチンパンジーと同じ祖先を持ち、さらにそこから三十八億年前まで遡ると地球上のすべての生物が同じ一つの細胞に辿り着くということだそうです。そして最初の生命の誕生は本当に奇跡で、そこから後は変化しては選択される進化のプログラムが時間をかけて繰り返してきたと仰っています。

私たちが、野村佳子生涯教育論第二章「野村生涯教育の構想」において人類史そのものが教育史であると学んでいることを、このことからもリアルに感じられるのでは、と思います。

そして、私が著書を読み一番ショックを受けたのは、過去地球には五回の生物の大量絶滅があったということです。最も近い絶滅は約六六五〇万年前、中生代白亜紀末期の大絶滅で、恐竜など生物種の約七割が地球から消え去り、さらに遡ると古生代末期、二億五一〇〇万年前には生物の約九五％が絶滅したと言われています。

この絶滅の原因はいずれも隕石の落下や火山の噴火など天変地異が原因と考えられているそうです。そして小林教授が仰るのは、現在進行中の大絶滅は申し訳ないことに、人類の活動が原因で引き起こされているということです。つまり、隕石の落下級以上のダメージを人間が地球に与えているということで、本当にこれを読んだ時にこんなにも人間は罪深いのかと思わざるを得ませんでした。

私たちが無自覚に行っていることが本当に些細なことではないのだと思います。人類がこのままの経済活動を続けた場合には、二十一世紀末に四度前後の気温上昇が予想されていて、その結果取り返しのつかない影響がもたらされるとも予想されているとのことです。

この二十一世紀末まではあと七十八年しかないのです。一九六二年から六十年経った今、当時には想像もしなかった世の中になっているわけですけれども、今から未来の六十年後、予想通りにいった場合には、孫子の代の地球は大変なことになってしまうのです。

一九六〇年頃、経済的に豊かになってはきたが、その経済的豊かさに反比例する形で、かつて物質的には貧しかった時代の日本には無かったさまざまな社会的不安の要因が生み出されてきたことを創設者は鋭敏に感じとり、この活動を始められました。その意義の大きさを改めて思います。

昔にはあって経済的豊かさ故になくなったもの、その大事さを創設者が私たちにずっと教え続けてくださった。それを知る手立てとして、一九六二年から約三十年後、そして今から約三十年前の一九九三年の一月、創設者がなさった年始の挨拶が野村佳子随想集『木もれ陽のなかに』に記されていて、私はその一端を感じるものがありました。そこにはその時代のお正月の情景が書かれています。

『三が日が終わってのお屠蘇の道具やお重箱など、漆器類の片づけにしても、たいへん手数がかかるんですね。昔から、ぬるま湯で洗い、三回は布巾で丁寧に拭くよう教えられてきましたから。やはり昔からの伝統を守って、手数がかかっても手を抜きたくないと思います。今はとかく簡便な世の中になり、便利さや速効性が尊ばれる世の中になっていますから、みんな手抜きをするでしょう。でもお重箱を拭きながら、ふと、こうした手間を苦にしないでできる心が、豊かさというものではないだろうかと思ってもみました。面倒くさいこと、体を使うこと、時間をかけることはさけ、より早く効率的に、体を使わないで効果を上

げることが善とされる傾向がありますが、私はむしろその逆のことが、これからの社会に必要になってくるのではないかと思うのです』と。

この本当の豊かさということ、手間をかけることを苦にしない精神の豊かさを読み、私自身が癒されていく感じがしました。そして創設者は続けて、『科学万能では立ち行かなくなるこれからの時代を先取りして、本当に大切なものは何か、本当のゆとりとは、豊かさとは、ということを、じっくり考えていくことが必要ではないだろうかと思うのです。そしてそれは単に精神的な問題だけでなく、地球規模で見れば有限の資源は確実にその絶対量を少なくしているということを考えると、そうしたベースの上に新しい価値観を作り上げていくことが大事でありましょう』と。

こうした心情とは程遠くなった現代、そのことを書いてくださった時代から三十年後の今、こういった精神が失われていき、地球環境が危機的な状況にあるのではないかと思うのです。創設者が仰る新しい価値観をつくり上げていく、これはつまり、何が本当に大事な価値で、何が二義的な価値かを見極める、狭い視野の中で価値基準を決めていくのではなく、地球規模の視野の中から考え直していくとき、もっと基本的な基準ができてくるのではないでしょうか。

そして世界をリードしてきた西欧科学文明が行き詰まり、ここまで来てしまった二十一世紀、創設者は東洋の、日本の持つ精神性、アニミズムの精神が、世界へ貢献ができるはずだと説いてくださってきたのです。

いわゆるアニミズムの精神とは、人間の霊魂と同じようなものが広く自然界にも存在するという考えで、自然界にも精神的価値を認め、これを崇拝する宗教の原型の一つで、世界各地でみられたそうです。日本でも古来、森羅万象に精霊が宿っていると信じられ、例えば山、海、川、動物、植物から家、厠に至るまでのあらゆるところに精霊、神が宿って人々を守っていると考えられていた。アニミズムの精神は日本のように気候風土が比較的穏やかな地域でみられ、これは自然を克服すべき対象としてみなす必要がなく、自然に対する畏敬の念が生じるからと考えられているそうです。

近代人は自然を自分のための道具とみなし、自然界の精神的価値を認めない傾向が強いが、昨今、自然保護思想の上でアニミズム的な感覚や発想を再評価する動きも起こっているそうです。

私たち日本人は、日本人にもともとあるこうした精神性というものを持っているはずですが、時代の流れの中で表面意識にあるのは西欧合理主義的な考え方なわけです。それだけに改めてこの地球規模での現実から見たときに、私たちはこのアニミズムの精神がどれだけ世界への貢献になり得るのかを自らに問いかけ、まず私たち日本人がその精神の掘り起こしをしていく。そこに日本の、日本人の可能性が見出されるはずですし、日本人の貢献できるものが見出せるはずです。その日本の可能性を見出すためにも、まず自分の可能性を見出さなければならないと思います。

それには今まで学んできてわかったような意識になっている自分から、野村生涯教育の目的とする自己実現、自己完成、人間性の開発、そしてかけがえのない生命としての自分、家族、仲間、動植物を含め、大事な価値に目覚めていく。頭の中で思っているところから、実践して血肉化していく。勿論今までも実践をしてきたから一人ひとりが幸せになっているわけですが、しかしこれは先輩方に導いていただいてきたものが大きかったはずです。今度は自らが先輩の立場であるという自覚の上に実践していくことがこの六十周年の意味、意義だと思います。

人類の歴史はまだ二、三〇〇万年という短い歴史であり、創設者は『人類や地球を破壊に追いやる愚かな行為は知恵ある大

人の行為と思えない』とおっしゃっています。先ほど触れたように、このような地球の状況にも関わらず、世界は対立分断していく方向へいこうとしています。

原始生命発生以来、長い進化の過程を経て両棲類、哺乳類、類人猿、現生人類へと、下等動物から高等動物へと、その長い歴史を辿り、その過程のすべての痕跡を潜在意識に蓄積して持っているのが人間です。この潜在意識の部分は自己の内部を内省、分析したときにある程度はわかりますが、それは極わずかな分野であって、その底の底には何十億年を生きてきた生命の経験した過去の蓄積があり、誰もが自己の知らない未見の我を持っている。そうした始末に負えないものが人間の一面にはあるという見方です。現代人が絶対視している理性というものが、この潜在意識の制約に如何に脆いか、それは日常生活の中でもよく私たちが経験することです。

創設者が仰る人類の三歳児的自己中心性や無知、そして欲望、嫉妬、羨望、憎悪、残虐性といったものの陶冶こそ、現代人が焦点をあてていかなければならない分野であり、万物万象を生かしている自然界を地球規模で人間が収奪してきている自己中心性を一人ひとりが身近な関係のなかで己に見ていくことが必要不可欠です。つまり、地球環境の生態系多様性においてあらゆる生命体と共に生きるという意識がないことも確かに問題ですが、それ以前に、人間同士の国レベルの不調和から足もとの家庭間の不調和を通して、一人ひとりの、私の、自己中心性克服の課題にしていくことの大事さを思います。それが野村生涯教育の人間性の復活をめざし、人間の無限の悪なる可能性の克服と、無限の善なる可能性の開発、この両面からの教育作業の実践になるのです。

二〇二二年、私たちは改めてこの教育原理の下、地球規模の環境課題をも視野に入れ、国や民族レベルの問題も、足もとの人間関係を通して自らが課題にし、自分自身をつくっていく。無自覚にも自分を育む地球そのものを住めない方向にもっていってしまっている、その一端を担っている自覚に立ち、永遠の生命の一環を生きる大事な存在であることを、まず自らが真剣に受け止め、自分以外の生きとし生けるものの尊さに目覚めていけるような一年になることを願いたいと思います。

冒頭、今年は寅年で壬寅という年回りの特徴として乳虎についてお話ししました。出産後の乳呑み児を持つ雌虎は家庭的でもあるが、性質が最も狂暴だと。そして意味としては厳しい冬を乗り越え新しいステージに向かう準備段階にあたる年ということでした。

新しいステージに向かう準備段階に、センターは入らなければならないと思います。それは孫子の代にこの地球を何としても残す方向に向かわなければ、この時代に生を享け、この時代を生きる責任を私が放棄することになり、責任を取らないことにも繋がります。私はそのような人間にはなりたくないです。

乳虎がその仔を育てるにあたり最も狂暴になるのは、何としても子どもを守ろうとするからと私は捉えたいと思いますが、その狂暴さを信念の強さに変えて、次世代に繋げるために、共に責任を取れる方向を見出すためにも、今年もぜひ皆さまとご一緒に学んでいきたいと思います。

本年もよろしくお願いいたします。

（一月十三日、新年運営会議から）

金子理事長より季節のご挨拶

季節のご挨拶を申し上げます。

二〇二一年も世界はコロナ災禍にあり、ワクチン接種や治療薬の開発など明るい兆しが見える一方で、それらが行き渡らない国々も多く、様々な問題が顕在化するとともにウィズコロナの日常を進める難しさを感じる一年となりました。

二十世紀後半から顕著になった地球温暖化について、ＩＰＣＣは昨年その報告書の中で、その原因は人間の活動にあることに疑う余地はない、と科学的根拠を示し断定しました。

私たち人間は自然界に生きとし生けるものと共存して生かされている存在です。その自然界の秩序・法則は、私たち人間の生きるルールであることを知り、この社会、あらゆる生命体の存続を脅かす地球環境をつくりだしているのは私たち一人ひとりの意識、行動であることを謙虚に受けとめ、自分自身の意識変革を続けていくことが今後の世界を作るのではないかと思います。

当センターは、本年創立六十周年を迎えます。

この節目の年に、人と人とが出会い、関わりをもてることに改めて感謝し、あらゆる事象、環境、そして人との関わりを通して主体的な成長を図り、教育の目的である人間、自己を知ることを続けていきたいと存じます。

皆さまにとって本年がより良い一年となりますようお祈り申し上げます。

（公財）野村生涯教育センター
理事長　金子由美子

The gate of the Nishiyama Honmonji Temple, Shizuoka Prefecture

Takachiho gorge in Miyazaki Prefecture

Season's Greetings

Dear Sirs,

Season's greetings to you all.

The world in 2021 continually experienced the impacts of the pandemic, and while there were positive signs such as increased vaccinations and development of therapeutic drugs, many countries have not been fortunate enough in accessing those benefits. Amidst many such issues surfacing, it was a year of us feeling the difficulties of mankind living alongside covid.

On the topic of global warming becoming even more pronounced since the latter half of the 20th century, the IPCC, in its report last year together with scientific evidence, stated there is no doubt human activities are the cause of global warming.

We human beings exist in the symbiotic relationship with all living things in the natural world. Knowing that the laws and order of the natural world are the rules which we humans live by, humbly accepting that it is the consciousness and actions of each one of us that create this society and the global environment that now threatens the survival of all life forms, while continuing to change our own consciousness, is what I believe will create our future world.

This year Nomura Center celebrates its 60th anniversary.
In this milestone year, I am grateful for us to be able to meet and interact, as I also continue my individual growth through various events, environments, and people in learning about mankind and self as the sole purpose of education.

I wish you all a very happy new year and a prosperous 2022.

Ever yours,

金子由美子

Yumiko Kaneko
Director General
Nomura Center for Lifelong Integrated Education

Paddy field in Gyoda, Saitama Prefecture

Scattering of small islands in Matsushima, Miyagi Prefecture

一昨年より続く新型コロナウイルスの世界的パンデミック下において、当センターでは事務局運営を縮小しながらも国際活動を継続している。

昨年もデジタル版「ノムラセンターニューズ」をホームページに掲載し発行、新年にあたっては、金子理事長の〝季節のご挨拶〟デジタル版を国連、ユネスコ、駐日の各国大使、世界各国のネットワークの方々に送付した。

昨年、コロナ禍であってもなんとか日本全国のメンバーと繋がることができたことを表現できたら、との金子理事長の意を受けて、前ページのようなカードとなった。

海外からも昨年暮れから新年に向けてのメッセージやカードが届き、そのなかには創設者の代に出会いのあった懐かしいお名前もあり、来る新年が共に慶しい年になることを願った。そのうちのいくつかを紹介する。

パトリシア・ミッシェ女史
（アメリカ・アンティオック・カレッジ　平和研究・世界法名誉教授）

季節のご挨拶をありがとうございました。あなたさまのこと、皆さまの素晴らしいご活動は常に私の心にあります。コロナという試練はありますが、心身ともにご健康をお祈り申し上げます。

バド・ホール氏
（カナダ・元国際成人教育協議会　ＩＣＡＥ事務局長）

金子理事長、また創設者の野村初代理事長から五十年にわたって季節のご挨拶をいただき嬉しく存じております。あなたさま、ご家族の皆さまのご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

ハンス・ケッヒラー氏
（オーストリア・国際進歩機構　ＩＰＯ会長）

思慮深く、賢明な新年のメッセージをいただき感謝申し上げます。私どもＩＰＯとして、自然への敬意を持つことに焦点を当てた内容を高く評価したく存じます。このことは五十年前のＩＰＯ創設の折、「進歩」を如何に定義するかについて、創立宣言の第一章に記した精神と共通しています。

また、貴センターの創立六十周年を心よりお祝い申し上げます。今年、貴センターと私どもの組織は共に節目の年を迎えます。何年にもわたる実りある建設的な協力関係を振り返ると同時に、互いに関心ある分野において協力関係を継続していけますことを願っております。

マリア・ツォンコバ女史
（当センターブルガリア支部責任者）

金子理事長、あなたは常に、私たちが人としての責任を果たすことを鼓舞し、その責務がなぜ果たされなければならないのか、真の世界の有り様を示してくださいます。

私は前向きに考えます。なぜなら、目的をもって、日々の努力を継続することで私たちの願いは成就すると学んだからです。

自然界をはじめ政治的、社会的危機に直面している今こそ、私たち一人ひとりがこの真実に信念をもたねばなりません。

支部のメンバーと活動を応援してくださる方々にあなたからのメッセージを伝えたいと思います。関心と感謝をもって受け止めることでしょう。

今年はセンター創立六十周年ですね。おめでとうございます。

ノムラセンターニュース　八八号への反響

昨年一二月発行の『ノムラセンターニュース』八八号には、四月一日の「公益財団法人第九回設立記念式　財団法人設立四〇周年記念」と「令和三年度野村生涯教育講座開講」（本紙四三〇号特別編集版）そして二〇一八年夏の西日本豪雨災害を経験した岡山支部メンバーの「学ぶよろこび」を掲載した（四二七号特別編集版）。海外から届いた反響の一部を紹介する。

コリン・パワー氏（オーストラリア・元ユネスコ事務次長・事務局長補）

貴センターの素晴らしいご活動についていつもお伝えいただきありがとうございます。私の親愛なる友人であったマダム・ノムラとセンターの皆さまとの数々の素晴らしい思い出を思い越しております。

私は、今も客員講師として講義をしたり、主にアジア・太平洋地域に重点をおいた教育を受ける権利、持続可能な開発、平和と世界遺産について、そしてまたコロナ禍や気候変動、不公正に焦点を当てた論文を執筆しています。

皆さま、新しい年が幸多き一年となりますようお祈り申し上げます。

マグナス・ハーベルスラッド氏（ノルウェー工科大学名誉教授）

コロナ禍から学び、私たちがパンデミック後の新しい現実に向き合う時を待っている、そういった時にこのノムラセンターニュース発行の報をいただいたのはよいことでした。

コロナ後のニューノーマル、つまりは新しい日常、新たな生活様式が人間の開発に貢献していくことを願いましょう。

皆さまよいお年をお迎えください！

シャディア・ケナウィ女史（元ユネスコエジプト代表部大使）

年の瀬にあたり、皆さまと皆さまの愛する方々にとって、すべてが順調でありますよう願っております。

新型コロナウイルスの流行から、世界中の友人たちを守るために私たちがなすべき重要な事柄についてお伝えいただき、感謝申し上げます。

貴センターの最新情報をお知らせいただくことは、大きな喜びです。

こうして皆さまにクリスマスのお祝いと、幸せで健康な、そして平和な新年を迎えられますようお伝えするチャンスになりました。

ガザレポート

パレスチナ支部責任者のアマル・アブゥ・エマラ女史より、新年の挨拶と共に、ガザの子どもたちの笑顔が送られてきた。

この数年、毎年暮れにパレスチナ支部はガザ地区の子どもたちに防寒ジャケットを贈ってきたが、この冬は特に寒く、クリスマスに毛布が贈られた。

昨年五月に激しい空爆を受け七万人以上が家を失い、子どもたちが精神的ダメージを深く受けたとエマラ女史からの報告があった（四三一号特別編集版）が、この度の写真には、そうしたガザの人々や子どもたちはセンターの皆さまが自分たちを忘れずにいて下さることに感謝しています、とメッセージが添えられていた。

ガザの子どもたち